

## 毛綱

児玉 寛嗣

京都駅から4、5分歩くと大きなお寺が見えてくる。浄土真宗の本山のひとつ、東本願寺である。ここにはガラスケースに入った異様なものが展示されている。それは巨大な黒蛇がとぐろを巻いているようにも見える。近寄って見ると人の髪の毛を束ねたものと分かる。傍の説明書きなどからこの展示物の由来は次のようなことらしい。

幕末の蛤御門の変の際に起きた大火で類焼し、寺の象徴的な建物である御影堂、阿弥陀堂が灰燼に帰した。明治になって再建の話が持ち上がり、建設が始まった。巨大な建物の屋根瓦を支えるには数多くの太い梁や柱が必要だった。巨木を切り倒して山から運搬することとした。しかし、運搬の際に引き綱が切れる事故が続いた。当時の技術ではそれに耐えうる高強度のロープを作ることは出来なかった。そこで考えられたのが女性の髪の毛と麻を撚り合わせて引き綱を作ることだった。それは「毛綱」と呼ばれ、展示されているものは、長さ約70m、直径30cm、重さ375Kgとある。全部で53本作られた。なかには長さ100m以上のものもあったらしい。髪は信者から差し出された。供出元は富山県16本、新潟県15本、秋田県10本などが主だったところだった。

浄土真宗の信者は全国各地にいるし、寺は全国の信者に協力を求めたはずだ。日本海側の県からの供出が目立つのは、親鸞は越後に配流されたというから、そのあたりに浄土真宗の熱狂的な信者が多かったようだ。「本山の寺院の建設のために」と断髪したのだろう。「髪は女の命」とまで言われている。それを捧げたのだからその人の信仰の篤さが覗える。この綱のお陰で国の重要文化財となっている巨大な御影堂、阿弥陀堂が明治の時代に再建された。

今、もしこのような申し出が寺からあっても、極一部の熱心な信者を除いて協力は得られないだろう。昨今は仏教も「葬式ビジネス」と化した感があり、心の拠り所となる教えをもたらずという過去の仏教の役割からは程遠い状態だ。僧侶たちはこの毛綱を見てどう思うのであろうか。